

『貴族の巢』 - その手法の一面 -

齊 藤 陽 一

ツルゲーネフの『貴族の巢』は、様々な傾向の批評家から好意的に迎えられた。リーザとラヴレツキーの恋愛を中心に据えながら、それにかからめて農奴解放令前夜の貴族の状況を巧みに描いたことがこの作品の成功の原因と考えられるであろう。

この作品の大きな特徴は、『貴族の巢』という題名をもちながら、ヒーロー、ヒロインがいずれも貴族らしくない、ということにある。ラヴレツキーについては、彼の生い立ちを記した章で母親が貴族ではないことがはっきりと述べられている。(註 1) 一方リーザの方は、純粋な貴族であるが、最後に修道院入りするなど、その宗教性において貴族らしくない面を見せている。次の言葉は、ツルゲーネフが発表直前に付け加えた35章の記述で、彼の初めの構想には無かったものかもしれないが、マルファの言葉としてリーザの祈り方を「貴族らしくない」(註 2)としている。また、1857年ラムベルト夫人宛の手紙でツルゲーネフが、『貴族の巢』の主要な人物を宗教的娘だとしている(註 3) ように、リーザの性格が宗教的であることは初めから構想の内に入っていたと言えるであろう。つまり、リーザとラヴレツキーの恋愛を中心とするこの作品の根底には、貴族対農民という問題が明確に意識されているのである。そこで、リーザとラヴレツキーの恋愛というプロットにこの問題を反映させるためにどのような手法が用いられているのか、それをこれから見ていきたいと思う。

分析を進めるに当たっては、当時の貴族生活を特徴付けるもののうち、フランス語、トランプ、音楽の描写を手がかりにしたいと思う。フランス語とトランプに注目する理由は、次の3点である。即ち、プロットの展開の中で実際に登場人物がフランス語を喋る場面、トランプをする場面が多く存在するという点、登場人物の過去やその先祖たちへの言及の中に、そのフランス語の能力や、トランプへの熱中ぶりについての記述が多く見られるということ、さらには、この作品のヒロイン、ヒーローであるリーザとラヴレツキーには、フランス語を喋る場面がほとんど無いのに対して、マリア、ヴァルヴァーラ、バンシンには逆にそうした場面が多く見られるということである。(註 4) 音楽の描写については、プロの音楽家レムムの存在、それに登場人物が、実際に歌い、演奏する場面が多いことが注目する理由である。また、ソ連の研究家メンザローヴァが「ツルゲーネフのロマン『貴族の巢』における風景と音楽の役割」という論文で書いているように(註 5) 当時すでに音楽の集まりを催したり、子供の音楽教育のために家庭教師を呼ぶことが流行しており、音楽が当時の貴族生活においてかなり大きな位置を占めていたからでもある。

まず初めに、この物語の舞台である、マリアの屋敷への主要人物の登場をフランス語との関連で比較してみたいと思う。

バンシンは、第2章で登場するが、「均整のとれた騎士が、美しい栗毛の馬に乗って現れた。」(註 6) とあるように彼は騎士として登場する。そして、それに対する、女主人マリアの応答は、「こんにちは、ヴォルデマール」(註 7) というように、フランス語風の呼び掛けになっている。また、その後でバンシンは、馬の名前を「馬鹿げている」と言いながらオランダであると紹介しているが、(註 8) この名前も、『狂乱のオランダ』を連想させ、バンシンの騎士としての登場に一役かかっていると言えるのではないだろうか。さらに、第3章の終わりでは、バンシが入ってくると、「同時に反対側のドアの敷居のところ、スラリと背の高い、歳の頃19ば

かりの髪(註9)の黒い娘が現れた。」とあるように、リーザも、騎士バンシンの相手の姫であるかのように登場する。

ただ、この騎士は、第3章の初めにあるように一番最初にフランス語で話し掛けるのが馬である(註10) というような少し変わった騎士であるが、その事については、後で触れたいと思う。

一方、バンシンのライヴァルとなる、ラヴレツキーはどのように登場しているであろうか。彼が、第7章で、マリアの屋敷にやってくると、彼女は、「こんにちは、こんにちは、懐かしい私の従兄弟！」(註11) と呼び掛けている。これに対してラヴレツキーの答えは、やはり「こんにちは、私の善良なる従姉妹よ。」(註12) であるが、ここで注意すべきことは、マリアの方の「従兄弟」は完全なフランス語の表記なのに対して、ラヴレツキーの方は語源としてはフランス語ながら、表記はロシア語式になっているということである。が、この問題についてはまた後で、ヴァルヴァーラの登場と関連させて触れたいと思う。

ところで、ここで、ラヴレツキーの登場の際の彼の服装についても見ておきたいと思う。彼は、第6章の終わりで、出ていくレンムと入れ違いにマリアの屋敷にやってくるが、その時の彼は、「灰色の外套を着、大きな麦藁帽子を被って」(註13) いる。この格好は、騎士としてははなばなしく登場したバンシンと比べるなら、やはり一段劣るものと言えるであろう。またラヴレツキーの登場の際にも、バンシン同様リーザとの出会いがあるが、リーザの彼についての印象も、彼の行動すべてを含めての印象だが、「彼は何と奇妙なのだろう。」(註14) というものであった。

さて、このように、騎士として登場したバンシンと農民の血をひいて、決してはなばなしとは言えない登場の仕方をしたラヴレツキーであるが、この二人が一人の娘を争って意外にも騎士が負けるというように、ラヴレツキーの妻、ヴァルヴァーラの登場までは物語が進行する。そして、その際に音楽の描写とトランプの描写が巧みに用いられている。

まずバンシンは、第4章で新しいロマンスを書いたと言ってそれを披露に及び、この時はそれなりに成功をおさめるのだが、その直後、せっかく訪れたリーザと二人きりでピアノに向かうチャンスを台無しにしてしまう。レンムの前で彼の作曲した宗教カンタータのことをからかったことをリーザに非難されるのだが、その様子がピアノの演奏によって象徴されている。引用すると、「バンシンは、大きな音で決然とソナタの最初のいくつかの和音を鳴らしたが（彼は二部を弾いていた）、リーザは、自分のパートを始めなかった。」(註15) とある。さらに、演奏が進んで、第2楽章にはいると、「20小節目で2拍ほど遅れたバンシンは、もちこたえられなくなって、自分の椅子を笑いながら脇へやってしまった。」(註16) とある。これにより、二人の将来が怪しくなるとともに、ピアノの演奏技術によって、はなばなしく登場した騎士バンシンの底の浅さもほのめかされていると言えるだろう。(註17)

一方、ライヴァルのラヴレツキーとリーザの関係はどのように描かれているであろうか。勿論、ヴァルヴァーラの生きていると思われている間は、いくらラヴレツキーがリーザに好意を持ったところで具体的な行動に移れる訳もない。当然、ヴァルヴァーラの死の知らせの後に行動を起こす訳であるが、その様子が音楽、トランプの描写と関連させて語られている。まず28章では、ラヴレツキーが、妻の死についての記事をリーザに見せるべくカリーチン家へやってくる。そして、マリアたちはトランプ、バンシンはベレニーツィナにロマンスを歌って欲しいとつきまとわれているという状況を利用して目的を達する。そしてそれを見ていたバンシンの方は、リーザをいくらか悲しそうに見ることになる。

30章では、マリアとバンシンが一階でピケットを、マルファがナスターシャと二階でドゥラキーをしている所へラヴレツキーがやってくる。二階へ上がった彼は、マルファがトランプの真っ最中なので手持ち無沙汰にしているが、そこへリーザが現れる。マルファの勧めもあってリーザはラヴレツキーの相手をする事になり、ピアノを弾こうかと提案をする。そのため、二人きりになる機会が生まれ、リーザは、バンシンの結婚申し込みに対する返事をラヴレツキーに伝えることができる。客間に降りた二人は、リーザがピアノを弾くのをラヴレツキーが聞くということになるが、このことは、リーザとラヴレツキーの関係をさらに親密なものにし、同じ客間でマリアとトランプをしているバンシンに不安な気持ちを起こさせることになる。

ところで、恋人同士がピアノの前で心を通わせ合う場面が16章にもある。ラヴレツキーが、プーシキンの『ジプシー』の中でゼムフィーラが歌う歌、「老いたる夫、恐ろしき夫」を妻とその恋人のエルネストが歌ったのを思い出す場面である。そこには、当然、プーシキンにならって他の男を愛しているぞという意味がこめられていたわけで、それを思い出したラヴレツキーの反応も、プーシキンの場合と同じく、二人を殺してやりたいというものであった。ただプーシキンと異なっているのは、『ジプシー』では殺す方のアレコが貴族社会を代表する人間であるのに対して、ラヴレツキーはこの場面で自分でも言っているように「祖父は農民だった」^(註18)ということである。そしてその農民を祖父に持つ彼が今度は、リーザのピアノ演奏を楽しみ、騎士として登場しているはずのバンシンに不安を起こさせるという構造になっているわけである。ここでも貴族対農民ということが意識されていると言えるであろう。

他の登場人物たちがトランプをしている間にリーザとラヴレツキーが心を通わせ合うという場面が、もう一度33章、34章に現れる。この日は素晴らしい夕べがやってきたために、マリアが「トランプはやらない、こんな天気にはトランプをするのは罪だ」と明言し^(註19)、やがてラヴレツキーとバンシンの間に議論が始まる。この議論ではロシアの遅れを指摘し、西欧の制度を導入せよ、というバンシンと、ロシアの独立性を説き、上からの改革の不可能性を主張するラヴレツキーが対立するが、ラヴレツキー優勢のまま終わる。そのため、リーザがなかなかプロポーズへの返事をしてくれないためにいらいらしていたこともあって、バンシンはトランプをしようとマリアに提案する。「バンシンが音を立てて新しいトランプの包みを破って」準備をし始めると「リーザとラヴレツキーはまるで申し合わせたように、二人とも席を立ててマルファの傍に場所を移す。」^(註20)リーザは二人の議論の間、ロシアに対する軽蔑の故にバンシンに反感を覚え、一方、ラヴレツキーの方も、実は、リーザを意識しながら議論していたので、この議論の後の二人差し向かいの時間がさらに二人の心を近付けることとなる。その描写は、次のようになっている。「マルファがトランプをするのを見ている間に彼等のそれぞれの胸の中には、愛情が成長した。」^(註21)

そして、10時になってマルファがナスターシャとともに自分の部屋に上がってしまうと、二人は、マリアとバンシンの方へ戻るが、彼等はピケットが長引いたので、まだ遊び続けている。まるで二人の心の変化に気付かぬように。

この後、夜遅くラヴレツキーはリーザと口づけをし、さらにレンムの家の傍を通りかかると彼の家から霊妙にして勝利を祝うような曲が聞こえてくる。

ここで、ついでにレンムの役割について触れておきたいと思う。上で名を挙げたメンザローヴァはこの場面と、26章でレンムが自作のロマンスを披露して失敗したことを対比させて、26章ではラヴレツキーとリーザの気持ちがまだはっきりしていなかったために彼の音楽も「こん

がらがって、不愉快に窮屈なものになってしまった」(註22)が、34章では、二人の関係がすでに明らかになったために、彼の音楽もすばらしいものになったのだというようにまとめている(註23)。

一方ヴィクトール・リップは、『ツルゲーネフのロシア』の中で、レンムをむしろバンシンの競争者として捉え、当時のツルゲーネフがディレッタンティズムの無力さについて関心を持っていて、バンシンのディレッタンティズムにレンムのスペシャリズムを対置させたのだと書いている。(註24)

ところで、レンムの役割は、変化していると言えるだろう。即ち、27章のヴァルヴァーラの帰還までは、レンムがバンシンに対置されている。4章でのバンシンのロマンスに対抗して26章で彼は自分のロマンスを発表するのだが、失敗に終わり、リーザの相手としての資格を失う。すると、ヴァルヴァーラの死亡記事が雑誌に載り、資格がラヴレツキーに移ることになるわけである。それ以後はレンムはラヴレツキーの協力者となり、34章では、彼の勝利を祝う音楽を奏で、37章では窮地に陥った彼を助けるべくリーザへの手紙を持った使者となる。さらに44章では、リーザと最後の挨拶を交わしてきたラヴレツキーに対して、「すべて死んでしまった」(註25)と宣告を下してラヴレツキーを退場させている。

以上見てきたように、ヴァルヴァーラの帰還までは、リーザを巡る男性としてまず騎士バンシンが名乗りをあげる。一方レンムも対抗しようとするが失敗、代わりに妻の死の記事を読んだラヴレツキーが名乗りをあげ、その非貴族的性格の故、むしろリーザとの関係を深め、バンシンの立場が危うくなっていくという風にプロットは展開する。そこで、今度は、ヴァルヴァーラの登場以後について見ていきたいと思う。

初めにヴァルヴァーラの場合もバンシン、ラヴレツキーの時と同じように、登場する時の呼び掛けについて見てみたいと思う。ヴァルヴァーラは、ロシアに帰ってきて、まず〇市にあるラヴレツキーの部屋に現れる。その時の彼女の第一声は、「テオドール、私を追い出さないで下さい。」(註26)というものであった。さらに何も分からぬまま彼女を眺めているラヴレツキーに向かって、「テオドール」と言い、もう一度「テオドール、御免なさい。」と三度も「テオドール」という、ラヴレツキーの名前、フォードルのフランス語風の呼び方を繰り返している。

その日はラヴレツキーは家を出てレンムの部屋に泊まるが、翌日、自分の部屋に帰ると、今度はヴァルヴァーラはフランス語を喋ろうとしない。そして、ここにはわざわざ、「もはや彼女は、彼のことをテオドールとは呼ばなかった。」(註27)と書かれている。ラヴレツキーの世界に受け入れられようとする彼女の意志が、表面的なものにせよ、現れている。

この時の精神状態が続いているために、彼女はカリーチン家に登場した時にもロシア語で話しかける。一方マリアの方は、相変わらず「こんにちは、ボン・ジュール」(註28)というようにロシア語とフランス語の混じった奇妙な挨拶をする。

しかしヴァルヴァーラの方はロシア語を喋り続け、マリアを驚かせる。ようやくマリアがヴァルヴァーラを食事に招待すると、初めて「ああ、わたしのおばさん」(註29)とフランス語で言って、あとはもう自由にフランス語を使っている。

この後、ヴァルヴァーラはピアノを弾き、居合わせた人々を魅了する。さらに、食後、彼女がブレフェランス好きであることが分かり、マリアを大いに感激させ、「こんな女性が理解できなかったなんてフォードル・イヴァーヌィチはなんて馬鹿なんだろう。」(註30)と思わせて

いる。ここにおいてヴァルヴァーラは完全にマリアの屋敷の一員として認められた。つまり、ある面でこの屋敷の貴族性にふさわしい人間であるということが示されている。それどころか、何とんでもフランス帰りの彼女故、その本質は40章に「ポール・ド・コックがデュマなどよりも好きだ。」(註31) とあるように卑俗な教養しかないにもかかわらず、それでもこの田舎町のサロンではやはり優れた存在で、マリアやパンシンの本質を暴露していくことになる。そこでそれをこれから見ていきたいと思う。

上では、ヴァルヴァーラのフランス語について見たが、そのヴァルヴァーラの「ああ、わたしのおばさん」に比べて、マリアの「こんにちは、ボン・ジュール」という形はやはり奇妙なものではないであろうか。また、先に述べた彼女がラヴレツキーを迎えた時のロシア語、フランス語が混じった「私の親愛なる従兄弟よ！」というのも、やはりおかしいのではないであろうか。もっとも彼女はその後二回ラヴレツキーのことをフランス語だけで「私の親愛なる従兄弟よ」と呼ぶので、これは西欧帰りの人間に対する彼女の当惑ともとれるのだが、それでも6章にマリアが「次のような女学校式のフランス語で評した」(註32) という記述があるので、やはりマリアのフランス語にはどこかきこちなさがあるようである。

ヴァルヴァーラの登場によって、正体が暴露されるのは、マリアのフランス語のみではない。彼女は、議論の時に不明瞭なことしか言えず、ヴァルヴァーラに「あの人は、あまり利口じゃありませんのね。」(註33) と評されている。そして45章には、パンシンがマリアを訪問することを止め、ヴァルヴァーラのいるラヴリキからほとんど出なくなったということが書かれている。つまり、ヴァルヴァーラの出現で、田舎町のサロンの女王としての地位を奪われることになるわけである。

それでは、パンシンの方はどのように変化するであろうか。彼がマリアの屋敷でヴァルヴァーラに会った時には、マリアやヴァルヴァーラはプレフェランスをしている最中であつた。その後、パンシンはヴァルヴァーラの誘いで歌い始めるのだが、彼は「初めはびくびく」歌うのに、そのうちに「熱中し、本当の歌手のように歌う」(註34) ようになる。つまり、ヴァルヴァーラ自身がパンシンに向かって「だって、あなたも芸術家、御同業でしょう。」(註35) と言っているように、二人の性格の親近性がほめかされているわけである。しかし、マリアの場合同様、それだけにはとどまらない。デュエットのためにヴァルヴァーラの色々挙がった中で彼は歌える歌を選ぶが、この曲すらヴァルヴァーラの助けでやっと歌うことができた。つまり、騎士として登場した彼の力量も、もともと馬にフランス語で話し掛ける奇妙な騎士だったのだが、さらに怪しいものになってくるわけである。そして彼の騎士性が最終的に崩れるのはこのヴァルヴァーラとの合唱の後の次のような記述である。「彼が相変わらず愛していた、昨晚、結婚を申し込んだばかりのリーザが、霧の中にでも消えてしまったように思われた。」(註36) これほど簡単に相手のお姫さまを忘れるようでは、騎士失格を宣告されてもやむを得ないであろう。

ラヴレツキーもヴァルヴァーラの出現によって、なすすべもなく、自らの無能力性を露呈するわけであるが、リーザはどうなるのであろうか。42章では下ではマリア、ヴァルヴァーラ、パンシンなどがトランプをしたり歌を歌っている時にリーザとラヴレツキーが二人で会って話をしている。その時リーザはラヴレツキーに修道院入りをほめかす。ラヴレツキーはそれが理解できないのだが、この二つの世界、トランプをしている貴族の世界と、貴族的でない宗教的な世界の対比が、45章のリーザの次の言葉へとつながっている。「ここは私の住むところではないと感じるんです。」(註37) つまり、ヴァルヴァーラの登場が以前から宗教性の強かった

リーザを最終的に修道院入りへと促したわけである。

以上見てきたようにこの作品には、貴族対農民という問題が根底にあり、貴族屋敷での貴族らしくない人物の恋愛が貴族生活にふさわしいものの巧みな利用によって描かれていると言えるであろう。

(注)

- (1) И. С. Тургенев, Полное Собрание Сочинений и Писем, Сочинения Т. 7, Москва, 1981 Ⅷ章
- (2) 前掲書 С. 113 (以下、この本からの引用はページ数のみ記す。)
- (3) И. С. Тургенев, Полное Собрание Сочинений и Писем, Письма Т. 3, Москва-Ленинград, 1961 С. 179
- (4) 例外として、31章で、ラヴレツキーがマリアとピケットをする場面が挙げられるが、これも度々やってくるラヴレツキーに反感を抱いたマリアを懐柔するためであって、彼自身にはトランプをする習慣はなかったと言えるであろう。また、フランス語についても、バンシンとの議論の最中に「『Le cadastre』とラヴレツキーは考えた。」とあるように、西欧の制度の導入を説くバンシンの議論への反応としてフランス語表記がでてくるのみで、パリ生活があるにもかかわらず、ラヴレツキーの言葉は一切ロシア語で表記されている。
- (5) А. Н. Мензорова, О роли пейзажа и музыки в романе И. С. Тургенева «Дворянское гнездо» — В кн. : Труды Четвертой научной конференции Новосибирского педагогического института, Т. I, Новосибирск, 1957
- (6) С. 13
- (7) 同上
- (8) 同上
- (9) С. 14
- (10) С. 13でバンシンはオルランドに " Eh bien, eh bien, mon garçon- " と話しかける。
- (11) С. 25「懐かしい私の従兄弟」は, " мой милый cousin "
- (12) 同上「私の善良なる従姉妹」は, " моя добрая кузина "
- (13) С. 24
- (14) 同上
- (15) С. 21
- (16) С. 22
- (17) メンザローヴァは、前掲論文で、ツルゲーネフがこの曲について、「最初のアダージオは」とか、「ソナタの第2楽章 (часть) —かなり速いアレグロ」と書いているのに注目して、この曲を「月光ソナタ」であるとしている。ベートーヴェンのピアノソナタで第1楽章がアダージオのものは、14番 (月光)、24番、26番 (告別) の3曲あるが、このうち2楽章がアレグロであるのは、24番だけである。(ただし、アレグロ

・ヴィヴァーチェ) また、14番はアレグレットで、メンザローヴァは、これを「かなり速いアレグロ」と解しているようである。(尚、26番の2楽章はアンダンテ) しかし、そうだとすると、ツルゲーネフは何故、「20小節目で2拍」などとこだわったのだろうか。しかも、数字に関しては、これほど細かく言及しながら、肝心の曲名には一言も触れないというのは、何故だろうか。が、もし、часть を「楽章」ではなく、単に「部分」と解釈するとそれも説明がつく。即ち、24番と26番は、1楽章の途中から速さがアレグロに変わる。そして、26番は、17小節目からアレグロに変わる。アレグロはアダージオの2倍強の速さであるので、もし、バンシンが、それまでのテンポ通りで弾くと、リーザが、4小節目進んで20小節目に達した時、2小節目しか進まずに、18小節目を弾いている、つまり2小節目遅れることになるのである。つまり、二人は、最初から「告別」のソナタを弾いていたことになる。ツルゲーネフは、二人の将来をソナタの曲名で暗示した、それも数字の中にひそかに曲名を忍び込ませたと考えるのは、考え過ぎだろうか。

- (18) C. 53
- (19) C. 100
- (20) C. 102
- (21) C. 103 「愛情」は、сердцеの訳
- (22) C. 80
- (23) A. H. Мензорова 前掲論文
- (24) V. Ripp, Turgenev's Russia, Cornell Univ. Press, London, 1980
- (25) C. 148
- (26) この三つの言葉は、CC. 114-115
- (27) C. 119
- (28) C. 123 "Здравствуйте, bonjour"
- (29) C. 125 "O, ma tante"
- (30) C. 128
- (31) C. 132
- (32) C. 80
- (33) C. 133
- (34) C. 131
- (35) C. 130
- (36) C. 132
- (37) C. 151